

水と文学 (10)



前東京都水道局理事 小泉 智和

「……俺は思うんです。あと10年もしないうちに、この国は俺たち中国人をうけいれざるをえなくなる。中国人だけじゃない、イラン人だってそうだ。だってそうじゃないですか。いくら認めないっていったって、現実的に、俺たちがいなければ困る工場や建設現場がいっぱいあるんだ。それに人口がどんどん減って、働く人間を外国からうけいれなければ、日本は駄目になります。そのことに気づいている役人は、いつか必ず、渋々でも、俺たちを認めますよ。そうなれば、金を持っている奴が勝ちです。アメリカだってそうだ。日本もそうなります。……」

大沢在昌の「新宿鮫8・風化水脈」の一節です。

この小説は、かつて淀橋浄水場があった裏手の十二社（じゅうにそう）と歌舞伎町を点と線で結び、中国人の高級車窃盗団と新宿やくざ、そして、それに鮫のように喰らいつく新宿警察の刑事を描いた物語です。

○ 大沢在昌のプロフィール

大沢在昌（ありまさ）は、昭和31年名古屋生まれで、今年47歳になるハードボイルド作家です。昭和54年、23歳の時、「感傷の街角」で小説推理新人賞を受賞しています。

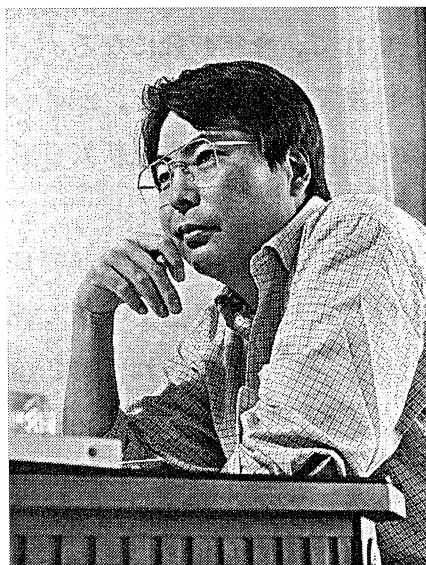
平成9年に出した「新宿鮫」で日本推理作家協会賞と吉川英治文学新人賞を受賞し、以後シリーズ化され、第2巻「毒猿（どくざる）」、第3巻「屍欄（しかばねらん）」と続き、第4巻「無間人形」で直木賞を受賞しています。第5巻は「炎蛹（ほのおさなぎ）」、第6巻「氷舞（こおりまい）」、第7巻「灰屋（はいや）」、そして第8巻が「風化水脈」です。

この他、「砂の狩人」、「B・D・T（掟の街）」、「天使の牙」等多くの作品を発表しています。日本冒険小説協会からは、「深夜曲馬団」で最優秀短編賞、「心では重すぎる」並びに「闇先案内人」

で大賞を受賞しています。

ちょっと面白いところでは、大沢オフィスの3人の作家が「大極宮」なるホームページを立ち上げています。大沢在昌が“燃えよ山椒太祐”、京極夏彦が“さまよう厨子王”、宮部みゆきが“安寿のがまぐち”と名のって、読者との交流の輪を広げています。

大沢は、この中で自身を「人生は、釣りとゴルフと酒とムニャムニャ 実はゲームも大好き 悪い噂(?)が絶えない困った奴」と載せています。



大沢 在昌

(光文社 提供)

○ 新宿という街

大沢は、「風化水脈」のあとがきで「“新宿鮫”というシリーズを書いているながら、主要舞台であるその新宿について、いったい自分は何だけ知っているのだろう、ふと顧みたことが、この作品を書くきっかけだった。もとより街は生

きものである。いかに歴史を知ろうと、その街の“今”を理解したことにはならないし、また付け焼刃で語れるほど新宿の歴史は簡単なものではない。だが、新宿副都心が旧淀橋浄水場跡地であるという、私の年代では“常識”に等しいような記憶ですら、現在の30代の人たちにはないわけで、ならば付け焼刃であろうと、新宿の過去を題材にしても、それは決して無意味な作業ではないような気がしたのだ」と、述べています。

彼は、第8巻で、「新宿区史」、「新宿の今昔」、「歌舞伎町」、「水道400年のあゆみ」、「玉川上水」、「下水道現況図」、「地下水」、「淀橋浄水場史」等、たくさんの文献を参考にした旨、記しています。

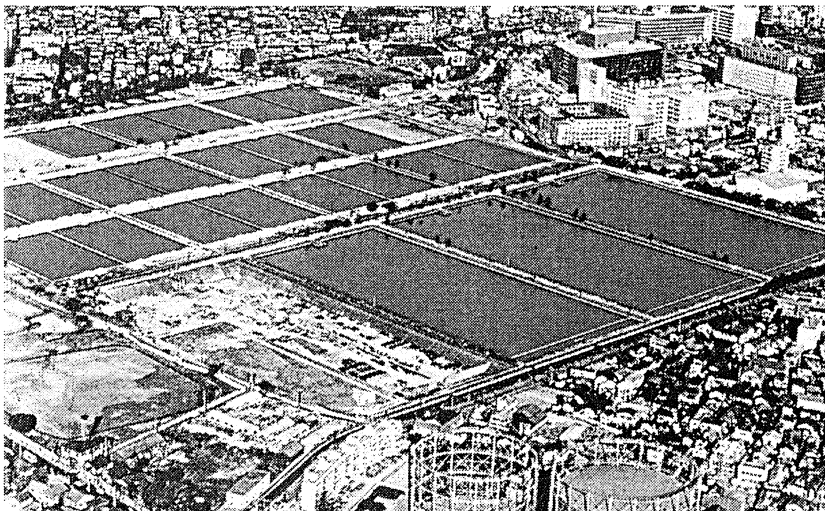
一昨年、キャバクラやマージャン店等が入った雑居ビル火災で44人の犠牲者を出した新宿。まだそんな記憶が新しい、この街の歴史を簡単に紹介しておきましょう。

新宿は、字のとおり、「新しい宿」で、五街道の宿場では最も遅く開かれた宿で、元禄10年(1679)に開かれました。開設当初から150人もの飯盛り女を置いたので大変風紀が乱れ、享保3年(1718)に宿を閉鎖されています。再開されたのは、54年後でした。

新宿には、大木戸門が設置され“入り鉄砲出女”が厳しくチェックされました。

玉川上水も大木戸門際までは開削で流れ下ってきましたが、大木戸からの江戸市中は、地中、石樋乃至木樋で給配されました。

明治になり、信州高遠藩・内藤家下屋敷の広大な土地が農事試験場（農事修学所を付設）になりましたが、花街のある新宿は学生によるしからずと、試験場は僅かの間で駒場（現東大駒場）に移転、後、宮内省植物園、更に国民公園としての新宿御苑となりました。



新宿駅東口は、江戸時代に宿が出来てからこの方、猥雑で、賑やかな街です。一方、新宿駅西口は、明治31年、淀橋浄水場が出来るまで野原でした。また、その後も10万坪の浄水場と専売局淀橋工場が



でんとあったので西口は長いことキツネやタヌキが顔を見せる街だったのです。新宿鮫の舞台である浄水場裏の十二社は芸妓300人を置く花街でしたが、余り人目につかない隠里でした。

西口が今日のように、賑やかになったのは、昭和40年に浄水場が移転してからです。

高層ビルが立ち並ぶこの辺りは、意外と地盤がしっかりとしていて、また岩盤

在りし日の淀橋浄水場（上）

今日の新宿新都心（下）

盤との間には、秩父山塊からの巨大な地下水脈が流れています。それ故、「風化水脈」の舞台十二社周りには、昔は池や多くの井戸がありました。小説では、十二社に昔から井戸のある1軒の空家とその前にある駐車場が舞台となっています。

○ 「新宿鮫」の世界

「新宿鮫」の鮫島刑事は、国家公務員上級試験に合格していながら、新宿警察署長預かりの形で、防犯課に配属されている“はみだし刑事”です。

その新宿警察は、私が勤めるビルの隣にあります。昔は、淀橋警察と言っていました。かつての淀橋浄水場の入り口近くにあつて、その用地は今も水道局の用地です。

新宿警察の管轄は、都庁舎のある新宿新都心や日本最大の盛り場・歌舞伎町です。書の中に書かれているように、「外勤の警官は普通3～4年の経験で、ようやく一人前といわれる。新宿署では1年で一人前になる。それだけ事故も犯罪も多い街なのだ」と、言われています。

歌舞伎町のやくざの世界は、非常に複雑で、多くの組がしのぎをけずっています。また、冒頭の一節のように、やくざ周りには中国、韓国、マレーシア、フィリピン、ミャンマー、タイ、バングラデッシュ、インド、イランといった国からの3万人とも言われる不法滞在外国人が見え隠れしています。

然して、やくざと水商売の水道、意外とトラブルが多いのです。私も水道局の営業所長になった時、13の組事務所に行きま

した。その多くは、雑居ビルに係る水道料金の未納問題（特に名義替による債権のがれ）でありましたが、他には、つり銭の間違いや、職員の言葉使い、工事現場でのトラブル等でありました。

組事務所へ電話になったり、街宣車で営業所へ行くぞと大声で脅されたり……

私は39歳、若かったので、“新宿鮫”よろしく、「どうせやるなら、きちんと青アザが残るようにやってくれ、警察で取り上げてくれないから！」と啖呵を切ったりもしました。S連合会の某組長から返ってきた言葉は、「やくざを脅すのか、いい根性している。役人辞めてうちの組へ来いや！」でありました。

何度か組事務所に行くうち、やくざも人の子、こちらが構えず、意を尽くせば、理解し合えると思いました。

やくざと警察の世界を描いた「新宿鮫」、読めば一味違う世界が見えてきます。



夜の歌舞伎町